

[書 評]

Ruth Glasner

*Averroes' Physics: A Turning Point in Medieval Natural Philosophy*

Oxford: Oxford University Press, 2009, pp. 229

ISBN: 978-0-19-956773-7, 218 × 25 × 145mm, £66.00

---

アダム・タカハシ

本書は、アリストテレスの作品の最も重要な「註解者」(Commentator)として知られた十二世紀スペインの哲学者アヴェロエス(イブン・ルシユド)(1126年頃～1198年)の自然哲学にかんする最初の包括的な研究である。アヴェロエスの名は「知性単一説」(全人類において知性は一つであるという説)とともに想起されることが依然として多いだろう。その説はトマス・アクィナスに代表される西欧の哲学者・神学者たちによって批判されたため、長い間アヴェロエスはどちらかといえば「悪名高い」人物として捉えられる傾向が強かった。

だが、そのようにアヴェロエスの哲学・思想を一面的・否定的に捉える傾向は、この十年ほどで劇的かつ急速に変わりつつある。結果的に、彼はアリストテレスの単なる解釈者としてではなく、独自の思想体系を有した哲学者として認識されはじめている。この近年の動向の中で、アヴェロエスの自然哲学像を大きく書き換える役割を果たしたのが、本書ルス・グラスナーの『アヴェロエスの自然学』である。著者のグラスナーはもともと十三世紀から十四世紀にかけて活躍したユダヤ人思想家ゲルソニデス(レヴィ・ベン・ゲルシオン)の自然哲学などの研究で知られた。中世ユダヤの自然哲学に対するアヴェロエスの影響を探ることから、アヴェロエスそのものの研究へと移行したと思われる。

本書は大きくA・Bの二部に別れる。著作の三分之一を占める前半のAは、アヴェロエスの著作の特徴、とくに「小」「中」「大」という三種類に分かれる註解の相違などを整理している。後半のBは、本書のメインとなる部分で、アヴェロエスの思想がいかなる意味で「中世自然哲学の転換点」となったのかが、特に『自然学』大註解の第六巻、第七巻、第八巻に即して語られている。

まず全体の序論では、グラスナーのアヴェロエスに対するアプローチの方法が述べられる。アヴェロエスは中世のイスラーム教徒の哲学者のなかで最も西欧の

思想の形成に影響を与えた人物であった。だが、これまで（知性論など一部の教説を除き）相応の注意が払われてこなかった。その理由を、グラスナーはアヴェロエスの書物の形式に求める（p. 3）（以下では、ページ数のみを記す）。アヴェロエスは、あくまでアリストテレスの著作に対する註解のかたちで議論を展開したので彼自身の立場が見えにくいのだ。著者はこのような彼の思想の展開様式を「釈義による科学」（science through exegesis）と表現した上で、そのような様式は彼の思想が持っている独自性や革新性を否定するものではないと主張する（3）。

次に、「アヴェロエスの著作の複雑性」と題された本書の前半をなす A の内容を具体的に見ていこう。ここでの論述の多くは中世哲学の専門家には自明のことなので、とくに注意を要する点だけ指摘したい。第一章「著作集の説明」ではアリストテレスの『自然学』に対するアヴェロエスの三種類の註解の形式と相違点が語られる。三つの種類とは、よく知られるように「小註解（提要）」「中註解」「大註解」の三種類である。本書で議論の中心になるのは「大註解」であるが、その形式はアリストテレスの『分析論後書』『靈魂論』『自然学』『天界論』『形而上学』の計五作品でのみ書かれたに過ぎない。加えて『自然学』の場合、『自然学問題集』と呼ばれるヘブライ語で（ただし、一部アラビア語でも）伝わるテキストも存在する。

第二章の「著作の順番」では、註解同士の関係が問われる。著者によれば、少なくとも『自然学』の註解にかんしては、決定的な著作年代を記す証拠はないものの、作品の「奥付」（colophon）へのアヴェロエス自身の書き込みなどから判断すると、概ね「小」「中」「大」の順番で書かれたようである（19-20）。ただし、後段で触れるように、それぞれ大幅な事後的な改訂が個々の註解に見られる。

第三章「変化する文化的文脈」では、『自然学』の「小・中註解」と「大註解」の間で、アヴェロエスが参照したテキストの差異が論じられる。前二者に比して「大註解」において顕著なのは古代の代表的なアリストテレス註解者であるアフロディシアスのアレクサンドロスの著作への依拠である（24-25）。アヴェロエスにとって、アレクサンドロスは単なる解釈の典拠としてではなく、場合によっては「アリストテレスの正しいテキストを確立する」ためにも利用された（25）。そして、後半の B でも議論の対象になるが、アヴェロエスのアレクサンドロスへの依拠がどの時点で始まったのかが、前者の思想の理解に対しては決定的な意味を持つ。

第四章「版と改訂」では、『自然学』の三つの註解の著者自身による改訂がまとめられる。著者によれば、これらの註解はいずれも「アヴェロエスによって大幅に改訂」されている（28）。小註解では、アヴェロエスが中註解を書いたあとに文章を挿入したと推定される箇所も見られるという（29）。中註解は二つの版が存在し、それぞれ同時代においては出回っていた。ただし、中註解については

アラビア語の原本は現存せず、依拠したアラビア語のテキストが異なる二つのヘブライ語訳で伝わっている (30)。著者によれば、この大註解は「おそらくアヴェロエスの註解のすべての著作」のなかで最も改訂されたものだ。『『自然学』大註解』のアラビア語原本は現存しないので、どの程度オリジナルから翻訳が隔たっているのかを判断するのは困難であるが、ヘブライ語版とラテン語版のそれぞれの翻訳では相当の相違が見られる (32)。

第五章「大註解の最後の層」では、著作に大幅な加筆を行うアヴェロエスが、最終的にどのような方法を採用したのかが三点にかんして論じられる。第一に、註解への「序文」の付加 (41)、第二に註解における論理的形式化の採用 (43)、そして最後に「(アフロディシアスの) アレクサンドロスへの転回」である (52)。前述の通り、アレクサンドロスへのアヴェロエスの関心の増大は、彼の『『自然学』の解釈の進化』を考える際に主要な問題となる。

では、後半の B「アヴェロエスの新しい自然学」に移ることにしよう。特にグラスナーの議論の対象になるのは『自然学』の第六・七・八巻に該当する箇所である。特に著者は、次の三つの主張に焦点を当てる (59)。

「いかなる運動の前にも、先行する運動あるいは変化が存在しなければならない」(Before any motion there must have been a previous motion or change) (『自然学』第八卷第一章)

「動く (= 動かされる) ものは分割可能でなければならない」(Everything that is moved must be divisible) (同書第六卷第四章)

「動く (= 動かされる) ものは、何かによって動かされなければならない」(Everything that is moved must be moved by something) (同書第七卷第一章)

この三つの命題にかんして、グラスナーによれば、アヴェロエスは自身の解釈を変更し、同時にテキストの改訂を行った。著者はここで示された命題の順番に即して、続く章でアヴェロエス自身の自然哲学理解の「転換点のパターン」(the turning point pattern) を論じていくことになる (59)。

第六章「『自然学』第八巻における転回点」で主題となるのは、第一の主張「いかなる運動の前にも、先行する運動あるいは変化が存在しなければならない」である。これを著者は「継起の議論」(succession argument) と呼ぶ。この議論あるいは主張は「世界の永遠性」の主張の基礎になり、かつ「不動の動者」の教説を導くものである。

グラスナーによると、アヴェロエスはこの「継起の議論」から導出されうる決定論を回避しようとした (62)。例えば、アヴィセンナの思想に示されるように、

イスラームの思想的文脈では決定論こそが科学的基礎を有していると考えられていた。対して、アヴェロエスは、アリストテレスの運動の「継起の議論」を「接触」(contiguity)の観点から解釈することで、ある運動が先行する運動によって規定されているとしても決定論的ではないと主張した(63)。「連続」(continuity)しているものは、分割される以前には本質的に同一なものを構成しているのに対して(前後の運動は本質的に同一になり決定論的な世界観が導き出される)、「接触」する事物は二つのものが空間的に結びついていても本質的には異なるものである。したがって、先行する運動は後続するものを本質的に規定しないのだ。

アヴェロエスは天界と月下界の区別を前提とした上で、前者においては事物及び運動が「連続的」(continuous)であるとし、後者にかんしてはあくまで「接触的」(contiguous)であるとした。そのことは、前者において変化・運動が決定論的であるのに対して、月下の自然世界においては非決定論的であることを意味する。アヴェロエスは、月下界における運動の契機が必然的な連続性を構成するものではないことを『自然学』第五卷第二章におけるアリストテレスの議論にも依拠することで論じようとする。古代からの註解の歴史において、その章で触れられる「変化の変化」という考えが「変化は偶然的のみに変化の帰結である」として解釈されたからである(72)。

では、本質的に連続的な天界の運動と、あくまで非決定論的であり接触的に生じているに過ぎない月下の運動とは、どのような相互関係にあるのか。本書において極めて重要な意味を持つのは、月下の自然世界の運動が、真の連続的な運動である天界の運動に従属しているとアヴェロエスが考えていたことである(78)。この二つの世界の運動の密接な関連性についてはアリストテレスが『生成消滅論』(第二卷第十章)において論じているが、アヴェロエスがくわえた新機軸は、月下界の運動の永遠性と安定性が、月下界の運動の「水平的」(horizontal)な考察からは得られないと考えたことだとグラスナーは述べる(79)。月下の自然世界の運動を天界との「垂直的」(vertical)な関係から説明することを、アヴェロエスはアレクサンドロスから学び、それに従った(80)。ここまで述べたような意味で、アヴェロエスは「永遠性と不変性とは連続的な[天体の運動]においては本質的で、接触的な[月下の事物の運動]においては偶然的である」と述べた(82)。この章の残りでは、この解釈の変更が小・中・大註解ごとに論じられる。

第七章『『自然学』第六卷における転回点』では、アヴェロエスが「個々の運動」(single motion)すらも「接触的」なものだと考えていたことが論じられる。アリストテレス自身、『自然学』第三、五、六巻で運動を論じているが、そこではいずれも運動は「連続的」なものとして捉えられている。対して、アヴェロエスはそれらを「接触的」なものとして解釈したのである(109)。

『自然学』第五巻・第六巻における「変化」の基本的考えは、すべての変化は

「何かから何かへ」(from something to something) の変化であるというものだ。ただし、この二つの巻では「瞬間的変化」(instantaneous change) について異なる立場が見られる。第六巻では、運動は始点から終点へのインターバルとして幾何学的に表現されるので、瞬間的変化はありえない(111)。対して、第五巻においては次のような論理でそれは可能であると解釈できる。「何かから何かへ」の始点と終点を構成する二つの「何か」は同じ類に属しているが、その二つの「何か」は「対立するもの」(contrary) か「矛盾するもの」(contradictory) かのいずれかでなければならない。たしかにある物体の色が「白」から「黒」へ変わるといった「対立するもの」の間の変化の場合、その中間に「灰色」が見出される。対して、異なる実体である「矛盾するもの」のあいだには「中間」は存在しない。「矛盾するもの」の間の変化、すなわち実体的変化(=実体の生成・消滅)においては瞬間的変化が可能であることになる。

ここで議論の前提として、変化・運動の理論にかんする対立的考えを理解しておく必要がある。一つは、変化が(何かから何かへ)の変化であるから、その最終的な何かである)「終点」と本質的に同じであるという立場だ。中世スコラで、その立場は「流れる形相」(forma fluens) 理論と呼ばれ、アヴェロエスに由来すると考えられていた。もう一つは「過程」としての変化に力点を置いた解釈で「形相の流れ」(flux formae) 理論と呼ばれるものであり、それはアヴィセンナの見解だと見なされていた(113)。著者によれば、「形相の流れ」という考えは変化が連続的で同質であることを示しているのに対して、アヴェロエスの「流れる形相」の方は、運動が非連続的であり非同質的なものとして捉えられていることを示しているという。

以上を前提とした上で、グラスナーが注目するのは、前述の通り、第六巻四章の「動く(=動かされる)ものは分割可能でなければならない」というアリストテレスの奇妙な命題とその解釈だ(115)。この命題の意味するところは、あるものの色が白から黒へ変わる時、その変わる物体のある部分はその始点(=白色)にとどまり、別の部分はずでにその終点(=黒色)にある、ということだ。この論理は、例えば場所移動のことを考えれば誤謬を含んでいることは明らかなように思われるが、テオフラストゥス以後の解釈者たちにとってより深刻な問題だったのは、この理論では瞬間的変化を説明できないことだった(116)。興味深いことに、この命題に直面してアレクサンドロスは瞬間的変化を否定し、すべての変化が時間的な経過のなかで生起すると主張した(116)。

このアレクサンドロスの理論を通して、アヴェロエスもすべての運動が時間的な経過をもって生じると解釈することになる。では、実体の変化のような瞬間的変化についてはどのような扱いになるのだろうか。そのことを理解するには、少々込み入っているが、アヴェロエスが運動をどのように定義したのかを再度見

る必要がある。彼は運動を「何かから何かへ」の変化ではなく、「静止点から静止点へ」(from rest to rest)の変化であると捉えた(117)。これによって、極めて重要な主張だが、アヴェロエスは瞬時の変化(すなわち、実体的変化)を、本当の意味での(すなわち、静止点から静止点へ)変化ではなく、別の真なる静止点間の変化の帰結でしかないと主張した(118)。

アヴェロエスは、今述べたように、本質的な運動はある静止点から別の静止点への変化であると考えていたが、その間に「中間的」(intermediate)な変化も存在する。ただし、それらは静止点によって境界づけられているわけではない。中間的な変化の終点は、別の中間的な変化の始点である(122-3)。ここで重要になるのが二つの「現実態」の定義である。二種類の現実態は人間の知性認識の二種類の現実態に対応している。すなわち、一つは「知識」、もう一つは「観照」である(127)。前者は完全に現実化した状態であり、可能態的なものは含まれていない。対して、後者は現実化する過程であり、その限りで可能態的なものを含んでいる。アヴェロエスは、この二つの現実態の区別を、先ほどの運動の二つの様態に重ね合わせる。完全な現実態は、完全な運動の静止点を意味する。対して、可能態を含んだ過程としての現実態は、中間的な運動の終点である(132)。この章を閉じるにあたり、グラスナーはアヴェロエスが新しい自然学を展開する転換点になったのはいつかを論じている。それによれば、それは後期の1180年代にはじまり、『『自然学』大註解』において示されたものだと論じる(138)。

最後の第八章『『自然学』第七巻における転回点』は、「動くものは、何かによって動かされなければならない」という命題との関連で、『自然学』第七巻における自然学的物体の議論が検討される。アリストテレスは一般に反原子論的な立場をとり、幾何学的な大きさも自然学的な大きさも同じ連続的なものとして語った(142)。だが、物体と運動とを連続的なものとして考える立場に対して、アリストテレスは別の立場も示していた。それは、後のアリストテレス主義の伝統においては、原子・粒子論的な「ミニマ・ナトゥラリア」(minima naturalia)の教説と呼ばれることになる理論だ(143)。ミニマは、いわゆる原子が現実的な実在としての分割不可能なものであるのに対して、あくまで分割することによって見出される可能的な最小原理である。ミニマの教説は、特にアレクサンドロス以後強調されるようになった。グラスナーは、のちのスコラ学者たちが議論するミニマの理論をアヴェロエスこそが発展させた主張する(145)。

その際にアヴェロエスの典拠となっていたのはアレクサンドロスの『ガレノス運動理論の論駁』であったと著者は述べる。その本でアレクサンドロスは、可能態的なもの現実化として定義される「本質的運動」を論じたが、どのような対象がそのような本質的な運動を有しているのかについては明示しなかった(147-151)。アヴェロエスは、この対象を「第一に動かされている部分」(First-Moved



Part) であると定義した (151)。そして、この「第一に動かされている部分」こそが「ミニマ」そのものだという (152)。グラスナーによれば、アヴェロエスの革新は、物体の本質的な運動が何によって担われているのかを明確に定義したことにある (156)。ミニマの理論は、アリストテレス主義と原子論という「二つの対立するシステムの狭間を橋渡し」する理論であったとグラスナーは最終的に結論付ける (159)。

全体の結論部でグラスナーは再度議論をまとめる。アリストテレスにとって、物体も運動も連続的なものだった。それに対して、アヴェロエスは運動と物体を、相互に同質ではないものの「接触」の観点から解釈することで、非連続的で非決定論的な自然理解を構築した。これをグラスナーは「アリストテレス主義的原子論」(173)と呼ぶ。著者によれば、この「新しい自然学」はアヴェロエスが『「自然学」大註解』に取り組んでいた1180年代に生じたものだ(173)。そして、その際に彼が依拠したのはアレクサンドロスの議論であった。ただし、この古代の註解者以上にアヴェロエスは原子論的な読解を押し進めることになった。これは同時代のイスラームの原子論に影響を受けてのものであったとも考えられるが、アヴェロエスはイスラーム神学の伝統に単に従うのではなく、あくまでアリストテレス主義的な原子論を展開した。そして、著者はその理論が西欧の中世から初期近代にかけての粒子論の隆盛の一つの基礎になったのではないかと主張する(175)。

グラスナーのアヴェロエス像は実に画期的なものである。上で触れたように、このようなアヴェロエスの「アリストテレス主義的原子論」を基礎として西欧の初期近代の粒子論が勃興しえた可能性は十分にありうる。ただし、彼女のこの議論には注意が必要だ。アヴェロエスの自然学と後世の原子論・粒子論との間には、他の様々な潮流が存在したことも確かであり(例えば、「キミア」(錬金術=化学)の伝統など)、両者の連続性を安易に結論づけることは避けるべきだからだ。また、本書の取り扱いで注意を要するもう一つの点は、本書の議論が必ずしも西欧人たちが読んでいたラテン語訳のテキストとは対応しない場合があることだ。しかし、このような注意点があるとはいえ、今後は、このグラスナーが示したアヴェロエスの自然学像を一つの指標として中世スコラ自然哲学の大幅な再考がなされなければならないことは確実であるように評者には思われる。

なお、本書に対して、フランス・イタリアにおけるアヴェロエスの自然哲学研究をリードするクリスティーナ・チェラーミ(Cristina Cerami)が“Corps et continuité. Remarques sur “nouvelle” physique d’Averroès,” *Arabic Sciences and Philosophy*, 21 (2011), pp. 298-318 という詳細なエッセイ・レビューをすでに執筆している。そちらも併せて参照されたい。